

# バイパス化と街の言説・表象

## —千葉県木更津市を事例に

法政大学 西田善行

### 1. 目的・方法

本報告では、国道 16 号の沿線地域である千葉県木更津市について、その発展と中心街の変化がどのような形で言説化、表象されたのかを、木更津について記述され、描かれた新聞記事やエッセイ、テレビドラマなどを対象に分析を行う。とりわけ街中を走っていた国道 16 号がバイパス化して街中を外れ、郊外に新たな住宅地が形成したことが、それまでの中心市街地にとってどのような意味を持ったのか、その道と街との関係について深く考えていきたい。

### 2. 結果・結論

木更津は古くから港町として栄えていた。当時の木更津の中心は港そのものであり、中心市街地も港の近くに作られていたのである。港の賑わいは明治期に入っても続き、定期船が往来する東京からの物資の集積地として「商都」木更津は活況を呈する。

一方、木更津は「軍都」でもあった。1936 年、木更津海軍航空隊が木更津港の北に設置、その後第二海軍航空廠も基地の近くに設立されるなど、「軍都」としての色彩を強めていった。

後に国道 16 号に指定される道はこうした木更津市街地の中央を通る道だった。江戸期には「房総往還」と呼ばれ、沿道には集落が作られ、道と街が沿う形になっていた。

戦後木更津は新日鉄の君津への進出を受け大きく発展する。君津エリアの商業中心地であった木更津の西口にある商店街は、大変な活況をみせることとなる。

この頃の木更津については、田原総一郎が記した、「塗り替えられる街の風景」という木更津の街を巡るルポがある。田原は公的な記録としては残りにくい木更津の風俗や、スーパー進出に揺れる商店街の様子を詳細に記録している。

当時の国道 16 号も含め車通りの多い商店街では買い物客が減少しつつあった。これを受け 16 号のバイパス化が始まる。

80 年台のバブル期の只中に出された月刊アクロス編集室による『「東京」の侵略』では、東京の土地価格高騰およびそれに関連する首都機能の一部移転を背景とした東京湾岸一帯の都市開発と交通網の整備の一環として、木更津を首都機能の一翼を担う場とするための木更津市都市整備計画が構想されるなど、「東京」を代替する新たな都市として期待が言語化されていた。

同じ 80 年代に国道 16 号のバイパス化が完了し、そのロードサイドに商業店舗が並ぶようになる 90 年代以降、木更津の中心市街地は衰退していき、大型商店が撤退、商店街はシャッター街へと変わっていく。2002 年に放送されたテレビドラマ『木更津キャッツアイ』は、この商店街を舞台に街の様子を描いている。宇野常寛や浅羽通明などの批評家は、このドラマを通して木更津の郊外としての閉そく感やそこで暮らす若者の感覚を言語化している。

木更津はその後アクアラインの通行料の大幅値下げなどもあって、アクアラインや国道 16 号、高速道路などの周辺地域に大型ショッピングモールや新興住宅地が建つことで人口増に転じた一方で、駅前の市街地は取り残された状態になっている。また木更津をめぐる「ヤンキー」イメージも定着する一方、ご当地ヒーローも誕生していて、いずれも空洞化した駅前がメインスポットとなっている。

以上の街と道、そして言説と表象の変遷がどのような意味を持っているのか、報告の中で明らかにしていく。

井出孫六・小中陽太郎・高史明・田原総一郎 (1978) 『変貌する風土—開発と地域社会』 三一書房  
月刊アクロス編集室(1987) 『「東京」の侵略』 パルコ出版